

**「その時代と仏教のかたち」****1 はじめに**

先週末、鶴田さんよりご連絡をいただきまして、今日この席で何か話をするようにとのことでした。それからいろいろと内容を考えました。現在では仏教書の出版物も多く、通信教育でお坊さんに成ろうかというご時世でございます。

そこで、知識としての普及は、かなり進んでいるように思われますので、ともすると理解できているような、錯覚を生じかねない様な問題や、お釈迦様が何を伝えたかったのかを、お話したいと思えます。

**2 お釈迦様の悟り**

初期の仏教といいますと、お釈迦様の悟りそのものを意味します。何を考えどんな行動をとられたのかということに他なりません。

多面的な見方が有りますので、一番よく知られている言葉でいいますと、「無常」ということでしょうか。いろいろな場面で使われますが、これは、「諸行無常」のことを指しています。

しかし、「無常」と言う言葉はともかく、そのあとに「諸法無我」であると続く事はあまり話にできません。実はこの「諸法無我」であると言うところが、仏教の特徴といえるわけです。

**3 大衆の仏教**

お釈迦様を中心に、集団が形成されますと、修行する者とそれを助けて信仰する者とができてきます。いわゆる出家と在家の区別ですが、これが後の大乘仏教を生む土壌となっていきます。

お釈迦様が亡くなられてから、何度も集会が開かれ、古参の修行者から在家の信者までいろいろな決まり事を話し合うわけですが、もともとが出家を前提とした修行形態でしたので、修行をするかしないかの二局しか無かったわけです。

しかし、在家の方の中にも、よく仏教を理解し精神的に崇高な境地に至る人がでてくるようになると、その垣根が徐々に無くなってきます。

そこで、出家修行をもととする一派と、在家修行も肯定する一派とに分かれていきます。前者はタイやビルマに代表される上座部の仏教で、後者は中国や日本に代表される大衆部の仏教です。

**4 命を生かす**

密教といいますと、日本では、奈良の仏教について、天台宗と並び歴史のある教えですが、仏教世界の流れで言いますと、後に鎌倉時代に花開く多くの宗派より後に成立したものです。

その特徴と言いますと、ものの見方が前向きと言いますか、乱暴と言いますか、無常を生き抜き、無我を楽しむというところにあります。一見お釈迦様の悟った内容に反するような物も、進むために利用するという荒療治な考えに基づいています。

それを説明するには、「仏は医者のごとく・教えは処方箋のごとく・理は薬のごとし」という言い方をします。

**5 基準の無いままに**

今また、出家することの意味や在家としての役割が問われていますが、方向性が多様化してきている現代で、いかに自立していくのが難しいか計り知れません。

修行する場所もさることながら、ある程度進んだ後に、実践する道場としての寺院が少なくなってきました。多くのお寺は、住職とその家族で運営される様になり、弟子をその傘下で育てていく環境事態が貴重なものに成りつつあります。

また、社会に向かっても、法人としての人格や社会性をことさら問われる様になりました。自由な発言が、個々の僧侶としてできない状況ができています。またその反面、利己的な解釈で仏教を食い物にしている僧侶もはびこっています。

**6 まとめとして**

日本人にとって心のより所はご先祖様です。宗教や思想に関係なく、肉親や先祖の御霊に対する思いはいまだに強く残っています。今は関心がなくても、いずれ物足りなくなり、心の透き間を埋めるように御霊をまつようになります。

そして、神道も仏教もまたその他の宗教も、その問題から逃れることはできません。信教の自由ということと、民族性とは逆行しているように思います。その思想形態で選ぶのではなく、供養するには何が最良なのかが価値判断の基準になっているようです。

修詮記